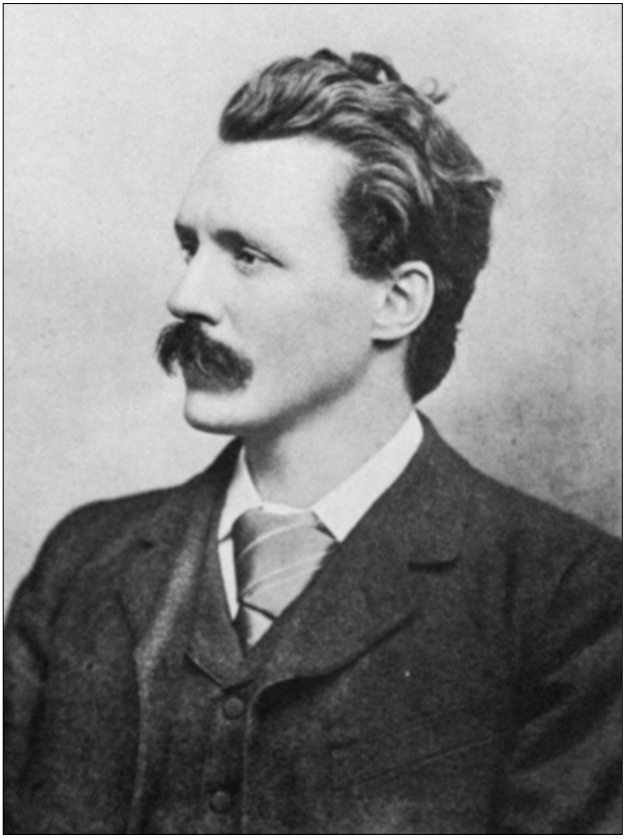
第二十五章

平和主義

――その気質の歴史的考察――

ピエール・クスティヤス



この写真は1895年1月16日にラッセル商会で撮影され、2月4日に創刊された定期刊行物『アルバム』の2月25日号別冊に掲載された（*Letters* 5: 278）。

第一節　私的・歴史的枠組

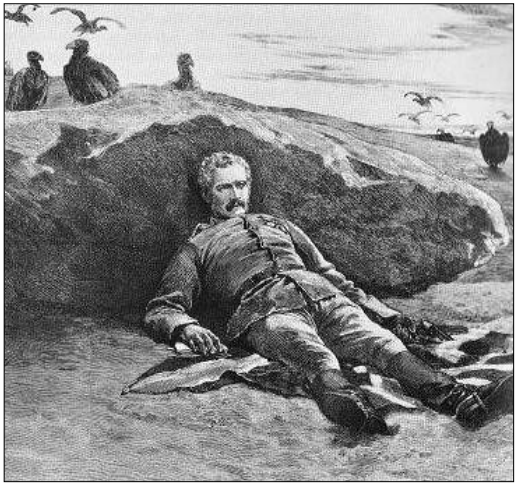
もしある批評家または文芸記者がギッシングの存命中に本章のようなタイトルの文章を発表していたら、彼はどう反応しただろうか。ギッシングが自作についての公の論評を歓迎したことは知られている。ただし、それはその作品の出来が良かったときのことで、そんなことはめったになかった。作家として駆け出しのころ、彼の作品について非常に理解のある批評記事を書いたドイツ人の友人エドゥアルト・ベルツにギッシングは感謝しているが、その記事は今日まで模範であり続けている（*Critical Heritage* 149-56）。また、一八九七年十月にはギッシングの意図と功績についてフレデリック・ドルマンが『ナショナル・レヴュー』に書いた賛辞（307-15）を読んで、『イヴの身代金』（一八九五年）以降の作品が取り上げられていないことを残念に思いながらも満足したことが分かっている。さらに二年後、アーノルド・ベネットが『アカデミー』の読者のために書いたギッシングの初期作品の概観（361-65）にも彼は満足し、その批評がふだん新聞や雑誌などに出るものより知的なものだと述べている。しかしながら彼は、自分が文学界を永遠に去ってしまうまでは、自分の著作についてすっかり満足のゆく論文が現れるとは思っていなかった。

さて、例えばボーア戦争（一八九九～一九〇二年）が勃発し、ギッシングの勇気あるイデオロギー小説『命の冠』（一八九九年）が出版された直後の一八九九年後半あたりに、彼の平和主義がきちんとした批評の対象となっていたとしたら、彼の反応は綿密に分析する価値があったろう。愛国主義（ジンゴイズム）の時代に、その批評家の意見が彼の意見と一致するかどうか、ギッシング自身が判断できたはずだから。自身の平和主義のイメージはおそらくギッシングにとって非常に魅力的なものとなりえただろう。作家としてこの時期にそのようなイメージが加わるのは願ったり叶ったりだった。彼自身、自分は平和を好む穏やかな気質の持ち主だと考えていただけになおさらである。彼の人格の基本であるこの点に関する証言には事欠かないが、なかでも最も正確で読む者の胸を打つ証言は彼の妹による「ジョージ・ギッシング――人物寸描」（一九二七年）と控えめに題された追想記事の中に見出せる。「彼の性質のなかにはある信条が深く埋め込まれていました。その信条のために彼は他人を苦しませるくらいなら自分自身が苦しむほうを選んだのです[1]」。

ギッシングの平和主義についてのいかなる議論も必然的に歴史の枠組のなかに置かれなければならない。一八五七年生まれの彼はクリミア戦争（一八五三～五六年）の直接の記憶がない世代のイギリス人だった。クリミア戦争はナポレオン時代から一八九九年のボーア戦争勃発までの間にイギリスが唯一巻き込まれた大規模な国際紛争だった。イギリス、フランス、オスマン帝国、ピエモンテがロシアと戦ったその戦争について、彼が

意見を書き残したということはないようだ。しかし筋金入りの自由党員で平和主義者の父トマス・ウォラー・ギッシングが、東方問題とその問題に暫定的な終結をもたらした戦いについて、長男の前で自分の見解を表明しなかったとしたら驚くべきことだろう。ギッシングの生きた四十六年間は概して彼の祖国が世界のほとんどの地域とうまくやっていた時期だった。しかし、当時ヨーロッパのあちこちで絶えざる脅威となっていた領土拡張論は、歴史学者が「植民地の小競り合い」と婉曲的に呼ぶ事態になっていた。もっとも、しばしばその争いはどんな基準に照らしても小競り合い以上のものだったのだが。この時代の国あるいは部族間の摩擦をかなり詳細に伝えている歴史書は、何度も危機があったことを明らかにしている。それらの危機は最善の場合には外交的に解決されたが、最悪の場合少なくとも一方は大虐殺で終わった。ロンドンの日刊紙でギッシングが見たのは、例えば一八七三～七四年のアシャンティ戦争、一八七七年のトランスバール併合、一八七九年のズールー戦争の記事であり、そして――徴兵制度に起因すると思われる種々の問題に無関心な国で、こういった出来事を平然と受け止める大衆により知られていたのは――マフディーの反乱と、一八八五年のゴードン将軍の壮絶な死（図①）を引き起こしたハルツーム強襲だった。当時「海外情報」といっていた事柄に関する新聞記事を読んで、ギッシングの恐れや憤りがかき立てられることは稀であった。人間は常に人間と争っているのだから、日々凶報がもたらされる定めであることは彼には分かっていた。もちろん自分の生まれた時代が進歩の時代だということを彼は否定しなかった。しかし、十九世紀の間にどうしたものか時代に「本質的に備わった」ものと見られるようになった進化（の概念）から来ている物質的な進歩と、人間性全体の精神的、倫理的向上との間には、いつもはっきり一線を画していた。

もしギッシングが生涯の終わりに人類の現状について聞かれたら、一八〇〇年よりも一九〇〇年の方が概して悪事（特に社



図①　帝国主義の英雄、ゴードン将軍の死。
1885年のハルツーム陥落はイギリス国内に大衆の抗議を引き起こした。

会悪）が減ったということに同意しただろう。例えば奴隷制は廃止され、人が他の人を搾取する事例はわずかながら減少してきており、貧困の苦しみもそれほど多くは見られなくなった。たとえ生活のあらゆる領域で未だ不正と不公平がさまざまな形で見られるにしても。同様に、偏狭と無知という不幸が過去の時代よりもいくらか目立たなくなったと認めたかもしれない。こういったことすべてにギッシングは気づいていたが、その時代の出来事にまったく、あるいはほとんど影響されない、より深い現実をどうしても無視することができなかった。そして、決して反駁されないほどの説得力をもって、『ヘンリー・ライクロフトの私記』（一九〇三年、以下『私記』と略記）の中でその現実について書いたのである。現在は忘れられているが非常に重要なこの本、すなわち人間の振舞いについての簡潔にして要を得た格言がちりばめられたこの本では、彼が序文で争いの普遍性と呼んだものが論じられている。「人間は仲間との平和な交際に向くようには作られていない。人間は生来自己主張が強く、一般に攻撃的で、自分に馴染みのない特質に対しては常に多少なりとも敵意を持って批判する。深く愛することもできるという事実は、人間の生まれながらの争い好きを時おり緩和し、その表出を抑えるにすぎない。最も広い純粋な意味での愛でさえ、危険ないらだちやもって生まれた神経過敏の予防手段とはならない」（「夏」第六章）。ギッシングは明らかにこの話題を穏やかに、そして客観的に扱おうとしているが、実際には彼の分身であるライクロフトを通じて――この場合、彼と分身とは一致している――「平和を好む人」という表現そのものが矛盾をはらんでいる、と示唆しているのである。「高い教養は自制に役立つかもしれない」と認めはするが、「それはまたいらいらさせられるような接触の機会を増やすことにもなる。大邸宅でも、あばらやでも、生活の緊張は常に感じられる――夫婦の間で、親子の間で、さまざまな程度の身内の間で、雇い主と雇われ人の間で。彼らは議論し、口論し、声高に言い争い、激昂する――すると神経が楽になり、再び次の喧嘩ができるようになる。家の外に出ると口論はそれほど目立たなくなるが、誰のまわりでもいたるところで起こっていることなのである」

第二節　子ども時代から世紀転換期へ

晩年に説得力をもって描いた現実について、ギッシングがすでに子どものころからおぼろげに意識していたかどうかは定かでない。また、彼にとって誇張は知的ゲームのようなものだったため、彼自身も時おり誇張したがることがあり、あまり頼りにならない子ども時代の記憶には偏りがあったかもしれない。しかし、一つだけ疑いの余地のないことがある。彼の導きの星は父親だったということだ。彼の父は平和を愛し、平和を人類の貴重な財産と考えていた。彼の母も平和を愛したが、それは家庭の静けさ以外の、あるいはそれ以上の理想はないとする規

律家としてであった。もし子ども時代にギッシングが騒々しい喧嘩を見ることがあったとすれば、それは家ではなく学校においてであった。伝記作家にとっては幸運なことに、普仏戦争勃発当時（一八七〇年）彼は日記をつけており、その不揃いの筆跡で書かれた日記の内容はプロシャによるパリ進軍への彼の関心を示している。[2] それから何年もたって大人になった彼は、普仏戦争が始まったと父が告げたときの恐怖をこう記している。「父は大声で言った。『ほら、またやっている、殺し合いだ』」。また、一八六五年のアビシニアへの英国軍派遣を父が激しく非難したことは注目に値すると思った、と一八九六年に記している。この意見を彼はある日学校で子どもらしく自信たっぷりに繰り返したのだが、先生に叱られただけだった。ジョゼフ・ハリソン師というその教師は戦争の遂行を賞賛し、「歴史上最もうまく遂行されたと言った」のだった。ギッシング少年が「そのような意見を耳にして困惑し、驚きの声を上げた」その勇気は賞賛に値する。ギッシングの一八九七年の小説『渦』に現れた、歴史とは悲惨な出来事の無限の連続という見解――その後『私記』でも繰り返された見解――は、悲観的進歩論者だった彼の父の意見に起源があったのかもしれない。『渦』のハーヴェイ・ロルフの苦悩に満ちた黙想を思い出してみよう。「毎時間のように悲劇が起きている世界に暮らし続けている人間の無関心に彼は驚いた。……そして彼が愛読するあの歴史というもの――それは声にならない嘆きの恐ろしい記録でなくて何だというのか。幾世紀も繰り返される苦しみを見つめ続けることに、どうしたら彼は喜びを見いだせたのか――戦争、伝染病、圧政、火刑柱、地下牢、とどまるところを知らぬ拷問、想像もつかないほどの残酷行為を」（第三部第一章）。

生涯を通じてギッシングはイングランドとヨーロッパ諸国との間の戦争の脅威に特に注意していた。彼の手紙や日記にはその脅威が恐怖とともに書き留められている。イングランドを巻き込む危険性がジャーナリストたちにとって魅力的な話題となると、いつも決まって出版業や著作業への国際紛争の影響が論じられる。彼はそのようなジャーナリストたちを新聞社主や有力な政治家の操り人形とみなしていた。一八九六年春『デイリー・メール』が創刊された。この半ペニーの新聞は売上げを伸ばすために、はじめから予測できた南アフリカでの結果を書き立てて故意に愛国主義をあおったが、それは明らかに平和を脅かすものだった。また来たる女王即位五十年祭の虚飾に満ちた祝賀を、ギッシングは二十五年祭のときと同様に歓迎しなかった。一八九四年の小説『女王即位五十年祭の年に』のなかで、彼はこの祝賀を思い起こしてもの笑いの種にしている。大英帝国の賛美は彼にとってとくに嫌悪すべきもの――そして危険なものだった。一八九五年一月と六月に編集者の要請で「地の塩」と「トゥーティングでの災難」という短篇を寄稿していた英国国教会の月刊誌『ミンスター』が、大英帝国の近未来についての意見や抱負を語り合う討論会に参加してほしいとギッシングに

依頼してきた。そのとき彼は依頼を即座に断った。「純粋で単純な作家が国益に奉仕できる最良の方法は作品の執筆に全力を尽くすこと――これがあなたの質問に対して私ができる唯一の答えです[3]」。

軍の派遣に対するギッシングの非難は変わることがなく、彼の根本にある人間主義（ヒューマニズム）と矛盾することもなかった。一八七八年二月十二日、コルヴィル・プレイス二十二番地の地下室から、彼は憤慨して弟のアルジェノンに次のように書き送った――もし自分が今書いている小説がちっとも進まないとしたら、その主な理由は「むかむかするような政治ニュース」（図②）にある、と。「ロシア人がコンスタンティノープルを占領し、地中海に小艦隊が派遣された、と今夜新聞各紙が伝えている。私はこれまでロシアを強く支持してきたが、実際今回の件ではロシアも英国と同様秘密裏に行動していたようで、すっかり嫌気がさしている。こういった……〈英国の国益〉についてのたわごとを聞くのはたくさんだ。まるで、何千人ものイギリス人を殺し、人口の半分を破滅と乞食生活に陥れる方が、結局は避けられないスラブ民族の進歩を一、二世代の間止めることよりも、われわれの利益にかなっているとでもいうように！」（*Letters* 1: 73-74）。その二、三ヶ月後、ヴィクトル・ユーゴーの理想主義的な予言を読んだ彼は疑念を隠せなかった。その予言とは――結局は悲しいことにまるで見当違いだったのだが――二十世紀には戦争はなくなるというものだったのである。

図②　ヴィクトリア女王と一緒に帝国主義の危険な水域に乗り出すディズレーリ首相

先に引用した争いの普遍性についての文章の萌芽は、生と死の問題について思いめぐらした彼の最後の本『私記』が形を取り始める前の、二十年に渡る家族との打ち解けた手紙のやりとりの中にすでに見ることができよう。個人的であれ国家規模であれ、反乱の出発点となりうるような、いかなる自由の侵害にも彼は我慢がならなかったが、それが時おり顔を出している。その一例は中期の小説『デンジル・クウォリア』（一八九二年）

にある。その中でタイトルと同名の主人公が漏らす次のことばは――主人公の気質も置かれている状況も自伝的ではないのだが――ギッシングのある種の気分とも通じる。「今日の午後ここへ来る途中、ストランドでどこかの新聞社の前を通った。そこではロシアの購読者から送り返された新聞を見せていた。記事が二本、検閲官の黒インクですっかり消されていた――その新聞はそんな状態で読者のもとに届いたのである。……ただそのためだけでもロシアとの戦争に万歳を唱えられただろう。ツァーリの大ばか者め、蟻塚の玉座に座って、時に止まれと命じているのだ」（第三章）。常識を無視したり個人の自由をひどく侵害したりするような何らかの私的あるいは公的行動によって、ほとんど正気を失いそうになったときのギッシングの気分は、クウォリアのそれと似通っていただろう。英国政府からの外交的、軍事的圧力に屈することを拒否したときの諸外国に対して彼が抱いた敬意は当時稀なものだった。アルゼンチン生まれの友人W・H・ハドソンに宛てた一九〇〇年七月八日付けの手紙に書かれた逸話は、イデオロギーに関する彼の信条の一面をうまく反映しているので、ここで引用しておこう。「世界の野蛮化が着々と進行していることは君もわかっているね。大虐殺［この悪い知らせはまもなく根拠のないものであることが判明した］を別にすれば、私は大いに中国人に同情する。彼らは英国人に来てほしくなどなかった。われわれを追い出すために常に最善を尽くしてきた。それに彼らの国にむりやり入り込むとは、われわれにいったいどんな権利があったというのだ。ああ、しかし彼らは大きな機会を失ってしまった。もし彼らがもう少し文明人として洗練されていて、国中のすべての外国人を集めて、誰も傷つけずに船で母国に送り返しただけだったら！もし敵軍が国内に入ったら誰でも殺されるだろうと知らしめただけだったら。そうだったら歴史のなかで語り継がれることになっただろうに」（*Letters* 8: 68-69）。

第三節　反帝国主義と反軍国主義

この逸話が示唆するように、ギッシングは文明や伝統がはっきりと異なった国同士の友好関係に対して決して反対ではなかった。知的好奇心があって文化的には寛容な個人として、そのような関係はきっと互いにとって大きな利益になるに違いない[4]と考えていた。しかし、まったく私利私欲の絡まない理想的な国と国との関係という概念は決して実現しないと、彼は経験から学んでもいた（実際には古代ギリシャ・ラテンの歴史の幅広い勉強がその根底にあった）。そして場合によっては、たとえばキプリングやライダー・ハガードのような場合には、文学的評価は政治的判断とは切り離せないということもわかっていた。少なくともキプリングに関しては、政治と芸術を互いに安全な距離に引き離しておくことにギッシングは一時的に成功した。キプリングの初期の作品に対するギッシングの判断が変化してい

くさまは非常に興味深い。それが彼の平和主義の指標となるからである。ギッシングが最初にキプリングに言及したのは一八九二年二月十三日で、まだこの若き同業者の作品を何も読んでいなかった彼は、アルジェノンの妻に宛てて「今最も関心が持たれる男」はキプリングだと書いている。「彼はすばらしいことをしたし、これからももっとすばらしいことをするだろう」(*Letters* 5: 8-9)。その後五月二十日には『兵舎のバラッド』(一八九二年)を読むようにと友人のベルツに薦めた。彼はこの詩の抜粋を読んで「非常に注目に値する作品」(5: 36-38)と述べている。兵士の俗語で表現されたバラッドにはギッシングとしても文句のつけようがなかった。そのことばは非常にうまく兵士のことばを模倣しており、しかも詩的だったからである。一八九四年十月二日の時点でも――そのころまでには間違いなくキプリングの作品をもっと読んでいたはずなのだが、ただしおそらく『ジャングル・ブック』(一八九四年)とその続篇を除いて――彼は依然として熱心にキプリングを支持していた。彼はベルツに「キプリングに対する私の賞賛と好感はいやが上にも増した。君が話していた短篇集[『多くの計略』(一八九三年)]は見事な作品だ。とくに良いのは「交通の妨害者」――力強い想像力のたまものだ。「女の愛」ではリアリズムと詩が結びついている。彼はすばらしい」(5: 241)とはっきり言っている。ギッシングのペンが再び賞賛のことばを浴びせたのは――今度はヘンリー・ヒック宛ての一八九六年十一月十八日付けの手紙において――『七つの海』(一八九六年)であった。この詩集は「間違いなく天才の独創的な作品」(*Letters* 6: 194)であり、従前のイギリス文学には匹敵するものはないと言っている。しかし、愛国主義(ジンゴイズム)の波が国内でいよいよ高まるにつれて、ギッシングは少々遅まきながらキプリングの政治的立場(図③)に気づいた。キプリングは、イングランドのあらゆる作家のなかで、実際に彼が会ったことのない唯一の作家であり、結局その後も会うことはなかった。

ガブリエル・フルリに霊感を受けて書かれた『命の冠』は、ある意味でキプリングと彼の暴力礼賛に向けられた小説である。次に挙げるきわめて重要な一節は一八九八年十一月二十七日付けでフルリに宛てた手紙のなかに現れる。「私の人生観は、

図③　マックス・ビアボーム「キプリング氏、恋人ブリタニアと楽しいデート中」(1904年)

これまでのどの本よりもこの本のなかで広がっていると感じます。ある程度はイングランドの『帝国主義』の最悪の側面を見せるつもりです――あの憎むべきイングランドの精神は、その貪欲と傲慢によって世界の平和をひどく乱す恐れがあるのです。この精神こそラドヤード・キプリングの文学に描かれているものです（彼は多大な害を与えていると思います）」（*Letters* 7: 236）。野蛮な目的の伝道師としてのキプリングに対するギッシングの反感は、彼がベルツのためにイングランドの文学的状況を概観したときに再び表明される。「キプリングは少年向けの本に手を出し始めた。どなりちらしているような本だ。あの男はひどい害悪をまき散らしている」（一八九九年一月十七日付けの手紙、7: 270）。おそらく彼は、この前年のファショダ事件で頂点に達した植民地での深刻な摩擦を、キプリングの帝国主義者気取りに照らして見たのだろう。そして、彼は「フーリガンの声」[5]というう まい題をつけたキプリング攻撃文を書いたが、そこに現れたギッシング自身の反帝国主義的姿勢を、小説家ロバート・ブキャナンが賞賛した、と聞いて喜んだ。自称「大英帝国の闘士」の好戦的な精神ほどギッシングにとって憎むべきものはなかった。男子生徒のあいだで見られる野蛮な残酷さを公然と弁護する『ストーキーとその仲間』（一八九九年）は彼を憤慨させた。「こんな本は死刑執行人が燃やしてしまえばいい！　現代における最も悪趣味で野蛮な作品だ」（一八九九年十二月十一日付けのベルツへの手紙、7: 412）。

一八九九年十一月四日の『レヴュー・オヴ・ザ・ウィーク』に掲載されたギッシングの記事「テュルタイオス」は、スウィンバーンやその他の近視眼的な主戦論者（ウィリアム・ワトソンやラドヤード・キプリング）によって、そのころ発表された好戦的な作品をはっきりと非難している。現代の読者ならまず気に入るような記事である。そのなかでギッシングは女王陛下の平均的臣民さえも容赦しなかった。「軍楽は民衆の耳に不滅の魅力を持っている。高級仕立ての服を着ていようと安物の服を着ていようと、市民はラッパの響きが通り過ぎるときに足でリズムを取る。人を撃ちに（あるいは撃たれに）行こうとしている背筋をピンと伸ばした連中に、なかば羨望を覚えながら。羨望を覚えない耳にも軍楽は魅力的に響く。軍楽は原初的な本能に触れ、民族の記憶を目覚めさせる。そして、戦争と考えただけで意識の底まで徹底的に嫌だと思っている人間も、自分がドンドン足を踏みならし、金管楽器と打楽器に合わせて首を動かしていることに気づいて、驚くのである。同じことが好戦的な詩についても言える」。それから、ギッシングはスウィンバーンの好戦的な調子の新しい詩「テュルタイオス」が民衆や議会の承認すら必要なしとしていることに触れ、テュルタイオスという発想は「時代錯誤よりももっとひどい」と切り捨てた。というのも、実際「テュルタイオス風の詩を奏でるその現代の詩人は、文明という至高の理想に自分自身を意識的に敵対させているのだ。……キプリング氏自身、人並み以上の頭を持ってい

るのだから、このことはおわかりのはずだ。キプリング氏も穏やかな気分のときには、人が互いの喉を切り裂かず、互いの頭を吹き飛ばさなくなる日が来るのを望む人々に、共感しないとは考えられない。もしそのように主張したことで不当に扱われるのでなければ、帝国の桂冠詩人であっても、高らかにラッパを吹き鳴らす前によく考えるべきではないか。そして、彼の月桂冠は血に浸されたほうが長持ちするのかどうか自問すべきではないか。詩才は特別な責任を課されているのだ。詩はその他のどんな形態のことばよりも直接的に心から心へ話しかけるのだから」。

ギッシングはあらゆる通俗的形態のナショナリズムと大抵それに伴う軍国主義とを怒りを込めて非難した。汎ゲルマン主義は、ヨーロッパの平和にとって脅威であったナショナリズムの高まりの中心にあったが、彼はその最初の影響を普仏戦争の時代に見ていた。ドイツによるナショナリズムの誇示に対するギッシングの感情は死ぬまでどこか曖昧なままだったが、それはベルツとの友情のためだった――彼は若いころベルツと社会主義的な意見を共有していた。しかし、ライン河の向こうのことを考えるときはいつも、悪いことが起こるのではと彼が心配し続けていたのは明らかである。ビスマルクに対する彼の感情は、一八七〇～七一年のプロシャによる侵攻がフランス市民のなかに引き起こした断固たる憎しみに通ずるものだった。一九〇三年二月十一日にかつての支援者フレデリック・ハリソンに宛てた手紙のなかの逸話は、ギッシングの感情を明白に示している。「ここ［サン・ジャン・ド・リューズ］には、かつて普仏戦争の前にビアリッツの海岸で高潮に流されそうになっていたビスマルクを救ったと自慢する男がいる。彼が大西洋の邪魔をせずにいてくれたらと思わずにはいられない。ドイツはかつて楽しい国だったし、教養の何たるかを教えてくれた――しかしそのころまだプロシャは砂のなかから姿を現してはいなかった」（*Letters* 9: 58-59）。ギッシングは一度しかドイツを訪れたことがない。一八九八年、カラブリアからロンドンへ戻る途中のことである。いたるところですさまじい軍国主義の兆しを目にしてすっかり嫌気がさした彼は、予定よりも早くその国を出なければならないと感じた。かつてあるフランス人が人生最後の年のギッシングについて「明晰な眼力を持つ陰鬱な人」と言った。この適切な呼び名を、人類の将来についてギッシングがどう考えていたかに当てはめれば、ギッシングは本当に有能な予言者だったと言える。彼は世界大戦が近づいていると感じていたのである。

しかしながら、人間が人間に対して狼のごとく残忍で、暴力のみが自己防衛の手段であった――私たちはこんな想像をしがちである――遠い時代の恐怖にギッシングが過度に影響されたわけではない。人類の歴史のほとんどは――客観的に考えてみれば――戦争と虐殺の歴史であって、歴史家にとって平和とは結局何も起こらなかった時期のことである。この点を説明する

別の逸話がある。ギッシングはルーヴル美術館で、ダ・ヴィンチの馬上の闘いの絵のルーベンスによる模写を見たことがあった。そのとき彼はふと立ち止まり、芸術における暴力の表現に対する自分の反応が一定でないことについて、常に感じていた疑問に答えようとした。「なぜこの場面は、例えばド・ヌーヴィルの戦争場面（図④）のようには、恐ろしくないのだろうか。衣装が古風だからではないか。戦争が、現在と結びついて不快感を起こさせるのではなく、文明初期に固有のものとして受け入れられるからではないか」（一八八八年十月十四日、*Diary* 51-52）。同様に、一八九七年クロトーネで病による熱にうかされて見た夢のなかの暴力の場面に対する彼の反応は、時の経過によって麻痺させられたかのように、恐ろしくはなかったのだった（夢のなかで見た場面が想像上のものであったことはいうまでもないが）。

逆に、ギッシングにとって祖国の次に重要な国イタリアの将来像は、国家規模での暴力の発展の恐れによって曇らされていた。彼の旅行記『イオニア海のほとり』（一九〇一年）の最終章に、イタリアの若き愛国の士エミーリオ・クッツォクレアの死について、魂を揺さぶる文章がある。クッツォクレアは一八六〇年、レッジョ・カラブリアの解放のための戦いに倒れた。このときギッシングは、彼が文化的に強い愛着を感じている地に対するブルボンの圧政に対して、憎悪を表明している。「この若き命が取るに足りないものであるという、まさにそのことがこの事実をいっそう痛ましいものにしている。この地で長年に渡って人類の野獣のごとき本能の犠牲となってきた、そうした数えきれないほどの命に思いをはせることになるから」。しかし、平和主義者ギッシングは、圧政者たちへの国をあげての憎悪を宣言した記念碑を見て、ただちに警戒の声を上げた。「この国の勢力がますます国際的な恐怖と憎しみへと向かっているとわか

図④　アルフォンス・ド・ヌーヴィル『ロンボワヨー門の防衛』(1870)

っていて、どうしてイタリアの統合と繁栄を大いに願うことができよう。イタリア再生のために死んだ人々が夢見たのは、古の残忍さが新しい武器で鳴り響くことではなかった。この時代、イタリアの愛国者には一種類しかいない。土壌を耕し、種を蒔き、収穫し、自分の畑の彼方のことは知らないか、関心がない者」。ナチズムについてはいうまでもなく、未だファシズムの罪に取り憑かれているわれわれは、歴史家ジョン・ペンブルのギッシング賞賛に加わらずにはいられない。『地中海への情熱』のなかでペンブルは、「リソルジメントの愛国的理想は裏切られ、イタリア自身が血まみれの暴君となるだろうと予言した」[6]ギッシングの先見の明に、心から敬意を表している。

反帝国主義が平和主義と手を携えるのは、ギッシングにとってはまったく論理的に思われた。E・M・フォースターと同様、彼は偉大さをもてはやす傾向をひどく嫌っていた。このために彼の作品とその世界観は、二十世紀の文学史家たちによってあるカテゴリーに分類される。それは、この時代以降キプリングやライダー・ハガードのようなイデオロギー的傾向をもった作家たちによって代表される冒険小説作家たちとは正反対とされるカテゴリーである。初期のものであれ後期のものであれ、彼の作品中に人種差別的といえるようなくだりを探し出すのは難しいだろう。なぜなら、基本的にそのようなものは彼の目には品位を落とすものと映っただろうから。実際、思い浮かぶ唯一の例は『ネザー・ワールド』（一八八九年）の「祭りだ、ばんざい！」の章（第二部第十二章）にあるが、それでさえ諷刺的な文脈のなかに現れるのだ。それは祝日の水晶宮（クリスタル・パレス）での場面である。労働者階級の低俗な娯楽についての注意深く分析的な描写のなかで、ギッシングは自分のように超然とした来遊者なら見るであろうものについて、「理性的な人なら、これらのゲームがいかに巧妙に群衆の愛国主義に訴えるようにできているか、興味深く眺めるであろう。ココナッツ競争で棒切れを投げたとする。すると、その的は木でできた裏切り者のアフガン人か卑劣なアフリカ人なのだ。木槌を取り上げてバネを叩き、どのくらい高くボールを打ち上げられるか試してみる。すると、その一撃はまた別の敵国人の頭を襲っているのである。筋力を測る計器をこぶしで叩けば、ロシア人とおぼしき男の腹を力一杯なぐっている」と想像する。どこを見ても「知性のみに訴えるような、あるいは美を愛する気持ちを育んで人を軟弱にするような」競技に参加する者はいなかった、と語り手は残念がる。そして、若者に関する限り、ギッシングはそのような行為に内在する危険を常に感じていたので、いかなる形であろうと若者の乱暴を非難した。

ギッシングは機会をとらえては、あるタイプの学齢の少年たちを容赦なく描いた。初期の小説『イザベル・クラレンドン』（一八八六年）のなかのストラットン家の少年たちが、全作品中で最もよい例だろう。彼らの父は陸軍大佐で、目下連隊とともにアフリカにいる。母は、四人の子どものうち三人が軍隊に入

る準備をしているときに、この小説のヒロインのもとを訪れる。語り手はストラットン家の子どもたちを、その粗暴で残忍な態度に対する敵意をこめて描いている。「この四人の少年は、どんな英国のご婦人がたも恥じることがないような子どもたちだ。体の成長も完璧で、肩から一直線に腕を突き出し、頭は石斧の一撃にも耐え、頬は赤く、ハンマーのような拳を握りしめている。幼いころは子供部屋で互いに鼻を叩き合ってけんかをした。学校ではそれぞれが全学年のボクシング大会で戦い抜いた。ほんの小さな子どものころから鳥撃ち銃を使い、親譲りの冷静さでもって鳥を殺した。彼らは横一列になって太鼓の音に合わせて早い足取りで歩く。視線はまっすぐ、銃身の先を見ているよう。耳をそばだて、侮辱のことばの百万回目の木霊でさえ聞き逃さない」（第一巻第二部第十一章）。そんな若き「悪漢たち」に対する母親の賞賛はかぎりない。ギッシングは上の二人の息子について「ストラットン夫人は、シェイクスピアとミケランジェロが双子で生まれてくるよりも、この子どもたちの母親である方がよいと思っただろう」（第二巻第一部第二章）と皮肉をこめて書いている。

ギッシングのリンドウ・グロウヴでの辛い学校生活の詳細を知っている読者なら、この文章の着想の源が容易にわかるだろう。それは父の死後、彼が生徒として従わなければならなかった教練である。かつての校長のジェイムズ・ウッドに、あるいは彼の妻に「母校[7]」の思い出を書くよう求められたとき、彼が如才なく触れずにおいた教練である。ギッシングは己の平和主義ががさつで耳障りな教練教官に侵害されたことを死ぬまで覚えていた。ヘンリー・ライクロフトに扮して彼はこう書いている。「彼が私に言った一言一句が侮辱に感じられた。……もし私に危害を、肉体的、精神的な危害を加えた男がいたとしたら、それは彼だろう。……よくあることだったが、整列中に私が何かうまくできなくて教練教官に叱られたとき、彼が私のことを『七番！』と呼んだとき、私は恥辱と怒りでかっとなった。私はもはや人間ではなかったのだ」（「春」第十九章）。子どものころも大人になってからもギッシングにとって、軍隊活動は戦時でも平時でも起こりうる集団殺戮の流血への準備であり、それはどんな形であれ人間への侮辱の現れだった。彼の私的な文書や小説のなかで最も忘れ難いことばの多くは、この人間への侮辱の現れに結びつけることができる。

第四節　人間主義と人道主義

後世において『備忘録』と呼ばれることになるもののなかにギッシングが記した死刑（「私はそれに対して本能的に不快感を覚える」）についての覚書きは、文明国なら検討せざるを得ない問題について彼が下した判断を示している。メイブリック夫人という女性の死刑に対して彼は一八八九年八月十四日に自分の意見を詳細に書き留めた（*Commonplace Book* 24-25）が、その後

このような非難が無数に現れるようになる。その一つ、ピアシー夫人の死刑は一八九〇年十二月二十三日付けで『備忘録』に記入されており、この問題を作品中で取り上げるという自分自身への約束が付記されている（44）。この時の事情は『私記』（「冬」第四章）に陰鬱に再現されている。「恐ろしい叫び声で私は目覚めた。暗闇で起きていると、通りを行く男たちの声が聞こえた。絞首刑がたった今執行されたと怒鳴っている。『××夫人の死刑執行』『絞首台での情景！』九時を少し過ぎたところだった。商魂たくましい新聞が早くも絞首刑を知らせる号外を出したのだった」。「死刑制度」によって合法化された「殺人」とそこから必死に金を稼ごうとする「新聞」。その三つの要素の結合がギッシングの思想の最も暗い部分を示している。彼のように来世の存在の可能性を否定していた不可知論者にとって、死刑のような罰は不合理であるか、途方もなく独断的で、理性に対して正当化できないことだった[8]。

ギッシングの作品を読めば読むほど、彼の平和主義は人間主義と切り離せないということが明らかになる。彼の人間主義は、苦しみにみちた人生の最晩年には、ちょっとした知り合いさえもが気づき共感するものだった。戦争と平和に関する彼の深い信念を誤解されることほど彼の心をかき乱すことはなかった。彼にとって最も不快だったのは、『渦』の中でハーヴェイ・ロルフが穏健な友人バジル・モートンに言ったことばについて、H・G・ウェルズが誤読したことだった。ある記事のなかでウェルズはギッシングを帝国主義という政治信条への新たな転向者と紹介したのだ。キプリングが『兵舎のバラッド』で示した人生観をあてこすり批判したロルフのことばをひどく歪曲して捉えている[9]。「これは強い男がはっきり意見を述べているのだ。……それは反動の声だ。何百万もの男たちが、自然のままの男たちが、穏やかで優しい文明に反旗を翻している。世界中の男たちが、何を望み何を望んでいないのか自分でもほとんどわからずに。そしてそこに彼らに代わって話す者が現れた――激しい調子で話す者が。……ホワイトチャペルの下町言葉がイングランド軍の銃に倣って生の欲望を大声でがなりたてている！――彼にはそれがわかっているのだ。この男は偉大な芸術家だ。自分の天才の声に微笑んでいる」（『渦』第三部第十三章）。少なくとも彼の小説二作を誤読したウェルズの長い批評記事を読むのは、ギッシングにとっては辛い経験だった。それが作家仲間によるものだけになおさら辛かった。ウェルズは彼の友人でもあり、彼の最新作をそこまでひどく読み誤るとは思ってもみなかったのである。ギッシングはウェルズの読みの浅さに驚いたが、その後一八九九年十二月に再び驚くことになる。ドイツ人の批評家フリードリッヒ・ヴィルヘルム・フェルスターが『エティシェ・クルトゥーア』十二月九日号でウェルズの不愉快な誤りを繰り返した、とエドゥアルト・ベルツから聞かされたのである。その後、イズリエル・ザンクウィルによって再び誤読されるが、その記事が現れたのはギッシングの死後で、『トゥ

デイ』一九〇四年九月三日号と、アメリカでは翌年五月の『リーダーズ・マガジン』に掲載された。

憐れみはギッシングの人間性を伝える主要な手段の一つであるが、後半生においてますます頻繁に彼の文章に現れるようになった。きわめて多様な話題についての意見を思いつくままに『備忘録』に記録し始めた直後、われわれはこの典型的な記載に出くわす。「非常にしばしば私の不幸のもととなるのは、人間が経験するあらゆる恐ろしい肉体的苦痛について思いめぐらすことである。火刑柱の殉教者、拷問部屋、闘技場等々。夜これらが私に取りついて離れない」[10]（*Commonplace Book* 22）。同じ『備忘録』の少し後に、クセノポンの『アナバシス』（紀元前四世紀頃）第四巻から書き写した恐ろしい話が出てくる。この話を彼は『私記』（「夏」第九章）で劇的な話に変えた。そこではある男が情報提供を拒んだために殺される。その情報を漏らせば、近隣に嫁いだその男の娘が見つけられる可能性があったのだ。不可知論者として必然的に彼は宗教によるあらゆる救いの可能性を拒否し、「主よ、われわれを憐れんでください！」という儀礼的な祈祷に対する軽蔑のことばを皮肉たっぷりに浴びせる。「これだけでも教会の儀式に嫌悪を覚えるのに十分だ。全知の存在とされるすべての造り主であり監督者から憐れみを請うなんて！」[11]（48）

すでに述べたが、すべて悲観主義者がそうであるようにギッシングも良き予言者だった。そして今後二、三十年間の息子の身の安全を心配していた。彼が初めてこの問題について意見を表明したのは、反愛国主義（アンチ・ジンゴイズム）小説『渦』においてであった。この小説は彼の長男ウォルターがまだ五歳のときに出版されたが、国民の誇りをかき立てるかもしれない軍事的な出来事が起こるたびに示される見苦しい歓喜に対して、彼は最善を尽くして息子に警告しようとした。「いま起こっている戦争について、君もときどき聞いているでしょう。理解しなければいけませんよ。（おばさんたちもきっと言うでしょうが）戦争というのは恐ろしいもので、野蛮人だけがするものです――恥じるべきものであって威張ることではありません。ある国の人たちが別の国へ行って、そこの国の人たちを殺すなんて悪いことだし、恐ろしいことです。戦争で勝つことが自慢できることだなどと決して思ってはいけません。そんなことについてたくさん話すことは恥ずかしいことなのです。そんなことをしていたと知って、いつの日か人々が驚く時が来るでしょう。私たちが自慢すべきは平和と優しさです――戦いと憎しみではありません」（一八九九年十二月二十九日付けの手紙、*Letters* 7: 419）。この手紙が小さな少年に送られたこと、その少年が一九一六年七月一日にドイツ軍の銃弾に倒れる運命だったことを考えると、その平和主義的内容がいっそう力強く感じられる[12]。

優れた友人クレアラ・コレットへ宛てた手紙も、この胸を打つ警告と助言の入り混じった手紙と同じ趣旨である。それは一九〇〇年五月のマフェケング救出後に、彼女が発した愛国的な

熱情の声に対する返事であった。ギッシングは彼女のことばを次のように訂正した。「私のけんか相手はイングランドではなく、イングランドの文明を変えよう、あるいはおそらく破壊しようと努めている人々です。イングランドの文明は全体としては世界がこれまで見てきたなかで最も有望なものです。……英国人がボーア人と戦うことの利点を調べてみたとは言いませんが、正当で重要な大義がそれを批判した人々に対する見境のない暴力に現れたことはまずない、ということだけは確信しています。……私は常にキプリングとその仲間たちを恐れてきましたが、彼らの蒔いた種がこんなにも早く実を結ぶとは思っていませんでした」（一九〇〇年五月二十三日付けの手紙、*Letters* 8: 50-51）。イングランドの多くの反戦リベラルたちにとっても同様、彼にとってイングランドが自らの名を汚したことは明白だった。彼が嘘をついたと後世の人間に責められることには結局ならなかった。

平和主義はギッシングの主要なテーマの一つにすぎないが、それは心引かれるテーマである。平和の使徒[13]ギッシングは思想の作家だった。「寛大で知的な思想の」と、今後付け加えられるかもしれないが、そう考えることで彼を適切な見方で――浅薄な楽観主義者たちとは違い、人生の不快な側面にも目を向けた人間として――もしかすると熱狂が人を間違った方向に導いていたかもしれない時に熟慮を呼びかけた人間として――ハーバート・スペンサーとともに「鉛の本能から金の行為を得られるような政治的錬金術はない」（*Commonplace Book* 26）とわれわれに警告した人間として――戦争で死をもたらす目的に用いられない発明などないということを、悲しくもわれわれに思い出させた人間として――見ることができよう。若き日にはオーエンズ・カレッジであれほど軽率な行動をとったギッシングが、経験という体罰によって理性と知恵のことばを、人間本位で、人道にかなった、人間味あふれることばを話すようになった。これまでほとんど認められてこなかったことだが、すべてを十分に考慮すれば、ギッシングはある特典を与えられていたといえる。自然は彼に厳格な良心を与えていたのである。

註

（1）Ellen Gissing, “George Gissing, A Characater Sketch,” *National Review* (September 1927): 417-24.

（2）ノの日記は、*Letters of George Gissing to Members of His Family*, ed. Algernon and Ellen Gissing (London: Constable, 1927) 4-7 に所収。

（3）*Minster*, January 1896, 67.

（4）個々の国同士の友好的で有益な関係とはどうあるべきか、ということに関するギッシングの意見については、一八九七年十月三日にE・L・オールヒューゼンに宛てた彼の手紙がヒントになるだろう。「植民地に出向く教養あるイングランド人は、大変重要な使命を帯びて行くのである。おそらくアングロ・サクソン人を待ち構えている苦闘のことを考えると、オーストラリアでもどこでも、まじめな気質の男たちが、いかに慎ましく目立たなくとも、

母国と植民地との間に良い感情が保たれるように働いていることを大いに望んではならないのだろうか」(*Letters* 6: 354)

(5) *Contemporary Review*, December 1899, 774-89.

(6) John Pemble, *The Mediterranean Passion* (London: Oxford UP, 1988) 239.

(7)「母校」は初め『ディングルウッド・マガジン』の一八九七年十二月号に発表された。その後、筆者によって *George Gissing at Alderley Edge* (1969) に再録された。

(8) すでに子どものころにギッシングは、平和主義者だった父が若いころに死刑についてのワーズワスのソネットを読んで、普段は好きだったこの詩人を強く非難するソネットを書いていたことを知っていたに違いない。

(9) H. G. Wells, "The Novels of Mr. George Gissing," *Contemporary Review* (August 1897): 192-201.

(10) 憐れみについては子どもに関するものもある。「貧しい家庭の子どもたちの悲惨さ。実際、彼らは貧困がもたらすものを感じている。愚かな母親から受ける苦しみ、ひっきりなしに平手打ちされ、叱られ、泣いている。裕福な子どもたちの運命との対照」(*Commonplace Book* 53)。ギッシングが一八九七年十月三日に作家ウェルズの妻キャサリンに書いた手紙は、この憐れみの問題をイタリアという国全体の問題として論じている。「イタリアはお好きですか?」と相手の質問を繰り返してから、彼はこう述べる。「実は、私はいつもあの国をひどい国だと感じているのです。言葉に表せないあの国の美しさは、どこへ行こうと血と涙の痕が見える、という最も暗い考えと切り離すことができないのです。なるほど、これは世界中どこにでも当てはまるでしょう。しかしここイタリアでは、他のどの国よりも多く思い出されます。来る年も来る年も繰り返される争いと暴政、大災害、宮殿と掘建て小屋における想像もつかない苦しみ。これらすべてを静かに見下ろしている青空に、どこか無慈悲なものを感じることでしょう。そして、国民については――何世紀にもわたる圧政をその顔に見ることができ、その声に聞くことができます。おっしゃる通り、イタリアは好きですが、それはとても特別な意味において、です」(*Letters* 6: 357)

(11) 結局、ギッシングの態度は一種の諦念だった。「無益な希望をきっぱりと諦める人は、その埋め合わせに日ごとに増す平静を得る」(『私記』「春」第二十章)

(12) 驚くべき先見の明で、ギッシングは『渦』の中でバジル・モートンに対してハーヴェイ・ロルフにこう言わせている。「われわれは息子たちが今はまだ名前もない爆弾によってばらばらに吹き飛ばされるのを見ることになるんだね」(第三部第十三章)。モーリー・ロバーツに対してギッシングは一九〇〇年二月十日に次のように書いている。「彼［ウォルター］が連隊を組んで行進し、虐殺したりされたりするのを予見するくらいなら、二度と彼を見ない方がよっぽどましだ」(*Letters* 8: 11)

(13)『命の冠』で、作中の平和主義者といえるかもしれないピアズ・オトウェイは未来の妻アイリーン・ダーウェントに、「これが世界の唯一の希望だと僕には思える――平和が宗教になるということが」(第三部第三十三章) と言う。

(田村真奈美訳)